

小田実全集（小説 第4巻）

大地と星輝く天の子（上）



講談社
小田実全集
Makoto Oda

大地と星輝く天の子(上)

目次

主な登場人物

第一部	鳥と	ミとカエルと矢と	6
第二部	裁判		293

—— 主な登場人物 ——

アニユトス 民衆派の領袖。ソクラテスを告訴する。

メレトス 無名悲劇詩人。「絶望を食べて肥る男」。ソクラテスの告訴人の一人。

リュコン 山羊ひげの三文弁論屋。ソクラテスの告訴人の一人。

ダモクセノス 少数政治を理想とする痩せた貧乏貴族。ソクラテスの告訴を裏面で画策する。

アガタルコス ダモクセノスの長男。メレトスの友人。

ケルドン ダモクセノスの次男。十八歳のややトウがたつた美少年。

ディオン スパルタ人。秘密機関の長。

ケパロス シリア生れの在留外人^{メトイコス}。銀行家にして企業家。

ガストロン ダモクセノス家の奴隸。革命を夢みる青年。

エリアントス 失業俳優。メレトスの友人。

マルプシアス 少しアタマの足らない大男。

カリクレス 貧乏靴屋。ケルドンの親友。結婚の相手を探している。

パウサニアス カリクレスの父親。

バスクレス カリクレスの義弟。

メレアグロス 医者。アニユトス、ダモクセノス、メレトス、リュコンの会談に証人として出席する。

アミュクラ デイオンの妻。

第一部 鳥とネズミとカエルと矢と

第一章

「ああ、若僧が歩いて行くな」

ケパロスはひとり言を言った。たしかに、その「ああ」という感嘆詞にふさわしい若者が、彼の卓子のまえをのろのろと過ぎて行く。右から左。左から右。ひとりの場合もある。群をなして、何やら傍若無人に大声で喚きたてて行くときもある。彼らの派手な服装が眼にチカチカする。アテナイの太陽は、真冬といえどもきつい。乾ききつた大地に白く輝き、燃え、その白いずんべらぼうの照り返しのなかを、若者たちの原色が動く。白い着物を着ているのは数えるほどだ。たいていが黒、紫、青。なかには赤いのを着ているのもいれば、肩の上になだてな短外套をひっかけているものもある。それに靴は、誰も彼もが、阿呆のようにおきまりのラコニア靴だ。真赤な靴。あんな靴は、昔は女でも履かなかつただろう。

そして、歩き方だ。

あれはたしかに何か目的を持った足どりではない。ここはアゴラだ。ペルシア人やスパルタ人なら、嘘つきとダボラ吹きと浮浪人の巢窟だと言下に断定するだろう、そのアゴラだ。人は、ここへ来れば誰だって、あの変人ソクラテスでさえが、幾分そんな足どりになる。しかし、昔には、もう少し何かがあつたような気がする。いつだったか、あれはソクラテスではなかつたらう、ソクラテスにかぶれ

た馬鹿者であつたにちがいない、アゴラの片隅で禿頭をふりふり、初老の男が中庸の美德について説いていた。「歩き方においても……」彼は聴衆（と言つても、聴いていた閑人はわずかに五、六人だつたらう）をぐるりと見渡し、おもむろに聖なる大地に唾を吐きつけてからつづけた。「紳士は中庸を重んじなければいかん。いいですかね、速からず遅からず、ゆつたりとして、しかも気取つていてはいかんです」演説のあとで、彼は自分でその中庸の歩き方なるものを実演してみせてくれたのだが、彼のそれは、まるで真冬のアクロポリスに群れる飢えたる鳥のように貧寒な感じがした。正視できなかったものではない。彼もまた、口では往時のアテナイの栄光をしのび、その現状を嘆き怒り叱咤しながら、彼の内部では、すでに過去のアテナイは音をたてて崩れ落ちてしまつてゐる、そうした情ない男たちの一人なのであろう。スパルタ軍の占領下、アテナイ市民は、彼らの過去の栄光の象徴の一つであつたアテナイ・ペイライエウス間の長壁が打ちこわされるのを目撃しなければならなかつたのだが、その作業が立ちこめさせた砂埃のなかで、市民の誇りと自信は、長壁そのものとともに音をたてて崩れて行つたのにちがいない。そのとき、その男も、そこに、その灰色の埃の煙のなかに、いたのだろうか。

つまり、すべては崩れ落ちてしまつたのだ。「若僧」どもは、今、いつたい、何を考へてゐるのだろう。彼らはケパロスの卓子のまえを過ぎ去る。まるで何事もとからなかつたように。三十年にわたるスパルタとの大戦争、ペロポネソス戦争がアテナイの大敗北で終つた、その終つたのがわずか四年前のことであるというのに。そのあと、スパルタ軍の占領があり、占領軍の威勢をかさにきた「三十人政權」の暴政があり、多くの人間が殺され、内乱が起こり、ようやくのことで民主政治がとり戻された、

それらすべてから、まだほんのわずかしか時日が経過していかないというのに——実際、彼らは何事もなかったようにケパロスの卓子のまえを過ぎ去って行く。だらけた姿勢。目的のない足どり。老人たちは怒っている。嘆き悲しんでいる。しかし、その老人たちの怒り、嘆き、悲しみは、「若僧」どもにはたして通じているのか。いや、彼らは逆に老人たちに食つてかかる。戦争中、あなたがたは何をしていたのかね。民会で喚きたただけじゃないか。たとえば情けないこの大敗北をもたらしただ遠因は、あの無謀・無慮なシケリア大遠征にあるのだが、それを決めたのは誰だったろう。あなたがた老人が、あの寝返り大将アルキビアデスを指揮官に選び、彼を万歳の叫びで送り出した。いや、こんなふうなことを述べたてるのは、「若僧」どものうちでも、ごく一部の年かきな連中だけだろう。大部分は、そんなことすべてを忘れ去っているように見える。いや、もともと、彼らは何一つ知っていないのだ。

とは言っても、ケパロスとは、そうした「若僧」、あるいはもっと正確に言うと、そうした「若僧」の出現という社会現象を、心の底から嘆き悲しんでいるのではなかった。まして怒っているのでもない。彼はシリア生れの在留外人^{メトイコス}だった。それにすぎなかった。彼がアテナイの土地に来てからもうかれこれ三十年は経つのだが、しよせん、アテナイは彼にとって「外国」であった。嘆き、悲しみ、怒りは、アテナイ市民のご老人がたに任せておけばよい。彼はそれよりも、金儲けに精を出すべきであろう。誰もが彼にそれを期待し、それ以外のことを期待していかないのだから。

ケパロスは銀行家であり、同時にまた事業家でもあった。銀行家としては、彼は、遠くエリュトウラ海へ貿易船隊をしたって大儲けを企む船主に巨額の資金を貸したこともあれば、夫に死に別れてア

ゴラで花売り女になろうとする、三人の子持の健気な未亡人にわずかな金を用立ててやったこともある。事業家としてのケパロスはもっぱら貿易商人だった。たとえば、彼の生まれ故郷シリアからの荷を積んで、ひと月に平均三隻、彼の持舟がフェニキアのシドンからペイライエウスの港に帰つて来る。

こういう銀行家にして事業家である男が痩せさらばえていたらかつこうがつかないのにちがいない。ケパロスはその貫禄にふさわしく、小兵ではあつたがゆつたりと肥えていて、何事が起こつても動じないふうに見えた。アテナイがどのようになると、ケパロスはひとり変らず、アゴラのこの一角に銀行業務の卓子をかまえて、金色に燦然と輝くダレイコス金貨を入念に数え上げていることだろう。相変らず「若僧」どもはケパロスの卓子のまえを右から左、左から右へ過ぎて行つたが、もはや、ケパロスは彼らに注意を払つてはいなかつた。客が来て、彼はすでに商談に熱中していたのである。

アゴラは、今が人の出盛りであつた。ことに、露店市のあたり、身動きできない。

いろいろな店があつた。カリクレスとケルドンはゆつくり見て歩いた。先ずソーセージ屋がさまざまな種類の腸詰のたぐいを、大きなゴザの上にひろげている。カリクレスの猪首のように太いのがあつた。心なしか曲つている。彼の皮膚のようになどす黒いのもあつた。ケルドンのすんなりした脚のように、細くて長いのもある。

「なかみは犬の肉かね」

ケルドンは悪態をついた。

「このど阿呆め、何をぬかす」

ソーセージ屋は彼をにらんだ。いやに痩せた男だった。眼つきが異様に鋭く、おまけに頬に切り傷があった。ケルドンは平気だった。さつきと歩き始め、平然と口笛を吹いた。大ディオニュシアの祭のときの旋舞歌を自分勝手につくり直したものだろう、カリクレスは、旋律が軽やかに出て来る彼の薄い唇を眺めた。唇はまるで女のようにやさしく紅いのだが、そこからは旋律も出れば悪態も出た。さつきケラメイコスの彼の店にいつものように「今日は」とも何も言わないのでつそり姿を現わしたときも、彼一流の悪態をついた。

カリクレスは靴屋だった。ケルドンのように遊び暮らしていいご身分ではない。明後日までポインクスの嫁御のために注文靴を一足仕上げる必要があった。彼女はまるで口から先に生まれたような女だ。ちよつとの落度でもこまめに発見して、それを値引きのかけ引きの材料にするだろう。カリクレスは朝早くから戸棚の皮革の束を取り出して、一枚一枚、念を入れて検討していた。そこへケルドンが姿を現わしたのである。カリクレスは、早速、彼にむかって「あの女は象の皮でつくった靴が似合うね」と冗談口を叩いた。「それはわるくない考えだ」ケルドンは、それが癖の大人びた表情でしたり顔にうなずいた。「しかし、ぼくはそれより人間の皮でつくった靴を履いてみたいな」「誰の皮かね」カリクレスは何気なく訊ねた。ケルドンはしばらく彼を見てから、さりげない口調で答えた。「あなたの皮だよ」

悪い冗談だった。しかも、そうしたことばを、ケルドンはいつも虫も殺さないようなあどけない表情で言つてのける。そのたびごとにカリクレスは焦らだつ。いや、彼はケルドンとともにいるだけで、

ときとしてどうしようもない焦らだちにとらえられるのだが、彼の風貌のどこにそれを感じさせるところがあるのか。眉目秀麗、見るからに上流階級の子弟然としていて、気品、落ちつきにも欠けてはいない。彼はすでに十八歳で「少年愛」の対象となるには少しばかり年をとりすぎていたが、少年のお金を掘ることに熱情を傾けたがる男なら、万金を投じてでも惜しいと思わないにちがいない。そして、そういう男は、アテナイと言わずスパルタと言わず、全ギリシアにあまりにも数多いのだ。カリクレスの妹婿のバスクレスなどもその典型的な一人だが、彼がケルドンに近づいたのも、裏に魂胆あつてのことであろう。おかげで、カリクレスまでが、この十八歳の貴公子と知己になる光栄に恵まれたのである。

そうは言つても、カリクレスは「少年愛」もしくは「お釜掘り」という、ほとんどギリシア全土に集団的に発生した病気には感染してはいなかつたから、ケルドンの美をかなり客観的に見ていた。たとえば彼の鼻はたしかに立派なギリシア型の鼻だが、その鼻の表面をニキビの跡がかなり濃密にそこなつていたりとか、彼の眼がかなりな程度に斜視だとか。もつともバスクレスは前者には決して気づかず、後者はケルドンをより魅力的なものにしているものだと広言することであろう。

「おれは、カリクレス、おじさんが好きなんだよ」

ケルドンは正面からものおじしない視線で彼を見すえる。

「ほとんど大人の男が少年を愛するようにね」

そして、ニコリともしないで、さらにいつそうぬけぬけとつづける。

「……と言うと、カリクレス、おじさんだつてまんざらわるい気がしないだろ」

つまり、それなのだ。ケルドンといると、そんなふうな奇妙な彼のペースにまきこまれて、カリクレスはくたびれ果ててしまうのだ。そうした大人びた言辞を弄したあと、彼は掌のうちにまるめていた甲虫を地面に投げた。甲虫には長い糸がついていた。その糸をつかつて、彼は甲虫を散歩させる。

ケルドンが糸を引くと、甲虫はのろのろ歩いた。どうして彼はいつもこんなものを持ち歩いているのだろう。一匹が死ぬと、新しいのをどこかで見つけ出してくる。「お守りかね」「いいや、玩具だ」そのケルドンの答は、案外、正確なのかも知れない。甲虫の糸を引つぱるとき、彼はお気に入りの玩具に熱中している子供のように見えた。甲虫がのろのろと動くとき、彼の眼は輝き、動かなくなると、熟練した手さばきで、あるいは強く、あるいは極度に静かに、なだめすかすようにかけ声をかけながら糸を引く。ホウ、ホウホウ……

「気をつけろよ、このトンチキめ」

カリクレスは大きな籠をかついだ市場の若い衆にぶち当たった。籠にはパンがいっぱい入っていて、危く地面に落ちかかった。逆の方向によろめくとケルドンが袖を引いた。何という魚か、巨大な魚を右手にぶら下げた老爺がよろけかかって来る。魚の油で、一帳羅の着物を汚されてはたまらないし、懐中物にも用心しておく必要がある。なにしろ、ここは、スリ、かつ払い、置引き、すべての小犯罪の本場であるアゴラなのだ。

「コックはいらんかね」

人の流れのまん中に立って、その流れに一人さからうように立って、まるで小人のようにちんまりした男がどなっていた。住込志願の料理人だろう。彼のことばには訛りがあつた。エリスから来たと

言いたいのだろう。エリスのコックには定評があった。しかし、ほんとうだろうか。彼はわざと詛りを使つてみせ、それでもつて自分をコックに雇ってくれる馬鹿者を待っているのちがいない。ほんとうは小男はエリスからなのではなくて、きつとアッティカの片田舎からやつて来たのだ。どん百姓め。おまえさんには豚の尻尾の匂いしかなしいぜ。しかし——ふと、カリクレスは小男が嘲笑したように思った。(おまえさんにだつてコックを雇うだけのお金がないのだろう)

ケルドンが笑つた。かん高い笑声である。神経にさわつた。

「何故、笑う？」

「だつて、おかしいもの」

ケルドンは笑いつづけた。

「カリクレス、おじさんは歩きながら眠つているように見えるね」

ケルドンはようやく笑いを止めた。

「それとも、おじさんは眠りながら歩いてるのかね。歩きながら眠る。眠りながら歩く。この二つのあいだに横たわる差異は重要だ。そこからすべての論理学は出発する。つまり、どちらに主体性があるかつてことだ」

「おれはソフィストは大嫌いだよ」

カリクレス是不機嫌に言つた。

「……と言うよりは、ものを考えるつてことが大嫌いだと言つたほうがいい」

カリクレスはケルドンをにらみつけたが、ケルドンもまた彼を何くわぬ顔で見返した。一発見舞つ

てやろうか。いや、この少年は一発見舞われたところで、表情一つ変えないのだろう。いわばケルドンは蝶々なのだ。ひらひら、ひらひら、眼のまわりをうるさく飛びはねる。両掌ではさみ込むようにして叩く。死んだ。そう思つて、掌を離すと、また、ひらひら、ひらひら。おまけに掌には、蝶の羽の粉がべつとりとくつついて離れないのだ。はたこうが、水で洗おうが、いつまでも執念のようにこびりついて離れない。ケルドンはまた大ディオニュシア祭の旋舞歌の旋律を口笛で吹いた。

「あれはウナギだな」

ケルドンがまた唐突に言つた。二人は魚市場に入つていた。てまえの店の台の上に、黒い太い紐が並べられていて、その紐はくねくねと曲り、またときどき痙攣した。みごとなウナギだつた。台のうしろに若い衆がのべつまくなしにまくしたてた。

「大将、買わんかね。え、このウナギをごろうじろ、ボイオティアはコパイス湖から直送のウナギだ。安くしておくぜ、大将」

ウナギに見とれている男が数人いた。アテナイでは、アゴラの買物はふつう男がする。女や奴隸などという愚かな動物は使わなくて、ご主人自らが出馬なさるのだ。食糧の買出しという大事なことを、女や奴隸どもに誰が任せておけるだろう。

カリクレスもウナギをみつめた。魚好きのアテナイ市民の例にもれず、彼も魚には目がなかったが、それにしても、高いだろう、とても買えたものでないのにちがひなかった。カリクレスはウナギと、その背後でわめきたてる若い衆から眼をそらし、空を見上げた。馬鹿みたいに空は蒼一色に澄みわたり、太陽の位置から見て、あとしばらくでまひるになるのだろう。

「ウナギはあきらめたほうがいいぜ、カリクレス」

ケルドンがまたませた口をきいた。

「私の手に負えないというのかい。大きにお世話だ。私はアゴラに買物に来たんじゃない。散歩に来たんだよ」

「あつちのヒラメにしたらいいよ」

カリクレスのことばにかまわず、ケルドンは顎を反対側にしゃくつてみせた。

「とりたてのヒラメだけ。あんたがた、こんな新しいのを見たことがないだろう。ペイライエウスから水揚げして来たばっかりだ」

二人の姿を目ざとく認めると、ウナギ屋の逆の側に陣どつた魚屋がここでもばかでかい声を出した。叫びながら、魔法にかかつてふくれ上つたようなヒラメの腹を、平手でピシヤピシヤ叩く。なにがとりたてなものだろう。あの腹の色の変わりぐあい、ぶくぶくぐあいから見て、昨日、いや、一昨日のものにちがいがなかった。痩せさらばえたハダシの老婆がかたわらに立っていて、行者のように大地の一点をみつめている。彼女はそのヒラメを買うつもりなのだろう。つまり、誰も買手がつかないのをみきわめてから、おもむろに安く買い叩く。

「このババアめ、あつちへ行きやがれ。こつちは商売やつているんだからな。営業妨害で巡査を呼ぶぞ」
魚屋はしつこく毒づいた。老婆は動じる気配もなかった。老婆は奴隷にちがいがなかった。安く買い叩いておいて、彼女に財布をあずけた頓馬で怠け者の主人から、小銭をかすめとる。これは賢い奴隷が毎日のようにやっていることだ。カリクレスは自分の家の奴隷のクサンティアスの顔を思い浮かべ

た。頬から顎にかけていちめんのみごとなヒゲ。彼も老婆のように、ずるをして小金を貯め込んだのにちがいがなかった。今では、奴隷仲間はおろか自由市民にまで高利で金を貸しているという噂だ。いっただったか、金を出すから自分の身をあがなって自由の身にして欲しいと酔ったまぎれに言い出したことがある。いや、あれはほんとうに酔っていたのだろうか。酔ったふりをして、こちらの意向を打診してみたのではないか。ひよつとすると、クサンティアスは今ではもう主人のカリクレスより金持なのかも知れなかった。すくなくとも、三オボロス（三オボロスあれば、辛うじて一日が食えた）の日当めあてに、早朝、夜がまだ明けきらないうちから民会、裁判所へ忙しく駆けつけるカリクレスの父親パウサニアスよりは金持なのにちがいない。すでに六十五歳だが、彼より二歳若いパウサニアスより、クサンティアスははるかに若やいで見え、風采があがった。それに反して、あわれなパウサニアスは、いっただつて水漬をたらしたらし生きのびているような感じがする。――

「カリクレス、あんなのと寝る気がするかね。百万ドラクマもらうとすると、どうかな」

ケルドンが老婆を見ながら言った。彼女は動かなかつた。あれは大地から根が生えているのか、大地震が起きてても、彼女はゆり動きもしないだろう。折れ曲つたような背中。汚ない着物。ひび割れが無数に走るハダシの足。足は奇妙に小さかつた。

「しかし、結局、同じだな。どんな女もあんなふうになる」

ケルドンは白い大地に赤いラコニア靴を蹴り立てた。そうしたとき、彼もまたいらだつて見えるように見える。しかし、何にこの貴公子はいらだつことがあるのか。カリクレスはふしぎなものを見る眼で彼をみつめた。彼の金色の長髪、ラコニア靴の真紅、その二つが白い陽光にひらめくようにゆれる。

「きみは女を知っているのかね」

「ある程度はね」

ケルドンはてんたんとして答えた。

「ペイライエウスで寝た」

「何人」

「さあね、三十人ぐらいかな」

カリクレスは、月に一度、アテナイの外港ペイライエウスへ商用で出かける。金のあるときは、帰途、娼家へ寄った。プラクサゴラ、バスクレイア、パンピレ、シミケ……腋臭の強い女。尻のところ
に痣のあった女。最中に大いびぎをかいて眠り、すむと、パッチリ眼を開いて「あら、もう終り」と
あつさり言つてのける女。つまりは、ケルドン少年の寝た女もプラクサゴラでありバスクレイアであ
りパンピレでありシミケであるのだろう。とすると、カリクレスは彼と「何トカ兄弟」の縁につながつ
ているのかも知れない。カリクレスは愉快になり、少年の肩を叩いた。「おまえさんとおれとは……」

「おじさんは嫁さんを貰うんだつてね」

ケルドンは歩き始めながらふと思いついたように言った。

「まあね、話はある」

「三十二歳だから、適齡だな、おじさんは」

カリクレスはうなずいた。

魚市場を抜け出ると、にわかに入出は減った。魚の匂いが消え去り、まひる近い太陽にほどよく温

められた大地と建物のひんやりと落ちついた石の匂いが立ちこめて来る。広場のところどころにスズカケの木が立ち、そのみどりの木かげに、さまざまな神像がさまざまな姿態を見せて所在なげに立っていた。神像のかたわらで話し込んでいる人たちがいる。歩きながら話している人もいる。広場を柱廊がいくつかとりまいていて、人々はそこにもいた。前方左方には市会所が見え、さらにその左には「トロス」と呼ばれる円屋根の優雅な建物が見えた。大部分が大理石づくりだったから、建物は、白、というよりは白銀の輝きを放って正視できないほどだ。

「もう相手は決まっているつてきいたよ。バッタロスの三番娘キユンノ……どうだ、凶星でしょう」
「誰に訊いた？」

「結婚周旋屋のグリユケラだよ」

「グリユケラ？ ……おまえ、あの女を知っているのか」

思わずカリクレスは立ち止った。

「アテナイは狭いからね」

ケルドンはゆつくり言った。

「たとえば、アゴラへ来れば誰にでも会える……ほら、あそこに一人の男がいる」

彼は突然背後をふり返った。銀行家の卓子の列が見えた。

「あの三つ目の卓子のところに人品いやしからぬ立派な紳士が立っているだろう。ケパロスの卓子のところだ。彼はアテナイの未来を憂えている。青年の墮落を歎いている。みんなのようにね、アゴラでダボラを吹いているみんなのようにね」

ケルドンはひとり言を言うようにつぶけた。そのあいだじゅう、赤いラコニア靴が白い大地を蹴り、金色の長髪がたれ下り、ゆれる。

「ただ、あの紳士がちがうところは、ただ一つ、みんなとちがつて真面目に、本当にそうしているってことだ。彼は愛国者だ。人格高潔の士、アテナイ市民の模範。貴族政治を主張する男で、かなり名声がある。弟子というのもあるくらいだ」

彼はふいにことばを切った。ラコニア靴は動きつづける。紳士はケパロスとしきりに何か話していた。長身瘦軀。こちらに背を向けていて、どこの誰とも判定がつかないのだが、荒野に一本立つオベリスクのように痩せた体にまとった白い上衣が、彼をすくなくとも貴族に見せた。風が吹いて埃がまき上る。なんとというすさまじい埃の立ち方だろう。埃が紳士とケパロスを含む。ケパロスはあわてて手を口と鼻にあてる。が、紳士は動こうとしない。紳士は何事が起ころうとも、あのように悠然とすべてに対してかまえているべきなのだろうか。

ケルドンのラコニア靴の動きが止った。

「ところで、カリクレス、ぼくはあの男を殺したい」

「殺したい？」

カリクレスはケルドンを見た。彼の表情には変化はなかった。やや紅潮した頬。女のように紅い薄い唇。輝きの鈍い眼。蝶々だった。一匹の白い蝶々がそこにいた。彼はおちついた澄んだ声でくり返した。

「そう、殺す」

「おまえは気がちがつたんだろう」

彼は答えなかった。

「あれは誰なんだ」

「ぼくの父だよ」

「何だつて!？」

ケルドンは落ちついた澄んだ声でもう一度言った。

「ぼくの父親だよ」

彼はまたラコニア靴を動かした。白い大地に赤い靴が動く。単調に動く。カリクレスはにわかに疲労を感じていた。

ラウリオンの銀山にいたときはひどかつたな。

奈落へそのまま通じるみたいなの坑道をそろりそろり降りて行く。頼りになるのは、ところどころの壁の凹みにおかれた粘土製のランプだ。いかにもなまけない光だったがな。それでもわしはまだ元氣じゃった。大きなツルハンを持たされてな、そのやつとこきたどりついた奈落の底でな、やけくそみたいになって掘って行くんじや。ときどき落盤があつて人が死んだ。ほら、こんな大きな、わしの体の五倍もある石が落ちかかつて来て、わしのまえにいた奴が石を投げられたカエルみたいにくしゃぐしゃになった。小さいのなら、しょつちゆうある。掘った石はな、モッコに入れる。運び役が来て持つ

て行くのだが、そいつらも惨めだったな。死んだほうがいいとしょっちゅう言っていた半爺さんがいた。半爺さん？ —— ああ、それはな、若いくせに、あんまり荷が重いだによつて、背中がくるくるに曲つてもうたんだ。わしらはそれで半爺さんと呼んでおつた。朝早く三オボロスめあてにあんたがたが民会へ出かけて、うつらうつら居眠りしながら演説をきいているころにな、わしらはあの暗い奈落の底でツルハシをふるつておつた。金もくれなかつたな。何故かというに、わしらは奴隷だからな。今だつて、大して変りはないが、それでも今は解放奴隷だからな。金の代りに、鞭だよ。朝から晩まで、鞭、鞭、鞭。現場監督というやつがいて、わしらを殴りつける。眠っているあいだけだったな、わしらに天国が来たのは。こんなに働いて、こんなに苦しんでいたのは、あんたがた、アテナイの紳士がたのためだよ。この銀山からのあがりを、みんなで分けなざる。そのうち、それでもつて艦隊をつくりなざる。スパルタと喧嘩するためにな。わしらには、あんたがたがなんでスパルタと喧嘩せならんのかついぞ判らなかつたがな。おおかた、今度のように、ボロ負けに敗けるためじゃつたらうな……けんどな、そのおかげで、わしは助かつた。戦争の最中に、スパルタ軍がラウリオンへ侵入して来よつたんじや。わしらは逃げた。スパルタ軍からじやない、スパルタ軍のなかへじやよ。わしはあれからスパルタへ行つた。やつぱり、奴隷としてだったが、いい気味だったのは、わしらに鞭をふりよつた現場監督が奴隷にされてしまひよつたことじゃつた。わしはスパルタにしばらくいてから、占領軍にくつついてアテナイにやつて来た。こつちへ来てわしのスパルタの主人が賭けをやりよつてな、スツカラカンになつたおかげで、わしは自分で自分の身柄を買つて解放奴隷になつた。……

「とつさんの話は相変らず長いな」

クレアンテスがあくびをしながら言った。「ときに、これで、何度目かね」

笑ったのは、彼自身とコノンととっさんの三人だった。クレアンテスとコノンはこの工事に賃貸しに出されている奴隷、とっさんは解放奴隷だったが、同じ一日一ドラクマの給金でやり手の工事請負人アリストポンにやとわれているテウクロスら三人の自由市民は、ニコリともしなかった。

とっさんが、さつき「あんたがた」と呼びかけたのは実は彼らなのだが——六人は、アゴラの柱廊の修理作業に駆り出されて来ているのであった。

ひと休みの時刻だった。朝早くから、重い大理石を転がしたりおっ立てたり、削ったりみがいったりして来たおかげで、奴隷も自由市民もともにくたびれ果てていた。地面に横倒しにした巨大な円柱の上に寝ころがったり、それを背中のクッションにして地面に坐ったりしてどうにか体を休めている。陽が照りつける。さつきまではこころよかった陽光だが、今ではもう暑すぎる。ときどき、思い出したように、アクロポリスから突風めいたのが吹き降して来るだけで風はほとんどなかった。風は吹き降して来るといよりは、吹き落ちて来る感じだ。広場にいくつか帽子がとび、とっさんを除く五人は、そのたびに几帳面に喚声をあげた。

風でうまいこと着物がまくれ上って、ついまえを歩いて行く女のサフラン色の下着が相当な程度見えたこともあった。下着は透き通っていた。五人は生唾をのんだ。彼女の髪は長く、頭上に複雑にまき上げたのが、陽の光に金色にきらめいた。しかし、それは天性の髪でなかったかも知れぬ。「それに、あいつは、たしかにお乳につめ物を入れているぜ」自由なる市民の一人が言った。そのときは、市民たちだけが笑い、奴隷は笑わなかった。後者の生唾の分量が前者に比して多かったのだろう。

「あのスケはいいじゃないか」

地べたにころがした円柱の上に寝ころがった姿勢で、ペリクレスが述懐した。ペリクレスといっても早合点しないでいただきたい。このペリクレスは、過去のアテナイ帝国の声望を一身に背負ったペリクレスとは似ても似つかぬ、貧乏で貧相な中年の小男だった。

「あんなスケと一度やつてみたいな」

ペリクレスのことばには、この明るい陽光のなかでだしぬけに陽物を露出したような、へんな生ま生ましさと間の抜けたところが同居していた。サフラン色の透き通る下着と金色の髪が、彼の視界のなかを挑発的に動く。テウクロスが笑い始めた。彼は、さつき彼女の胸の付加物について、一同の注意をうながした思慮ぶかい市民である。

「やつてみたいと言つて、おまえさん、あいつが何か知っているのかい」

「何かつて……女だろう」

奴隷をふくめて、ペリクレス自身を除くみんなは笑った。実際、もしかして、このペリクレスがアテナイの指導者だったとしたら、この奇想天外にオタンチンな男のおかげで、アテナイがスパルタに勝つというような椿事が起こっていたかも知れぬ。ひとときわ高く、クレアンテスが笑った。テウクロスは彼をにらんだ。クレアンテスは彼の視線に気づき、すぐ、しかし苦しげに、笑いを止めた。

「女は判っているよ。ただな……」

テウクロスはもつたいをつけるようにことばを切った。またしても突風が広場を襲い、砂埃がいちめに立ちこめる。しかし、もうそこには、サフラン色の下着のかがやき、金色の髪のきらめきもな

い。老婆が歩いている。幽鬼のように瘦せさらばえた老婆。あいつの陰部はきつきの女とは対照的に乾ききつていて、触ればカサカサと音をたてることだろう。

「ヘタイラだよ、あいつは……名前を教えてやろうか」

「アスパシアだろう」

それまで黙っていた自由なる市民アンドキデスが横から口を出した。テウクロスはニヤリとした。クレアンテスがまた大声で笑った。テウクロスは彼をにらんだ。今度は彼はなかなか笑い止めなかった。テウクロスは軽く腹を立てた。

アスパシアは大政治家ペリクレスの妻を追い出して、あと釜に坐った女で、もとはヘタイラだった。たいへんな才女であった。すくなくとも、そういつた話だった、ペリクレスの死後は、リュシクレスと同棲して、彼をいっばしの弁論家に仕上げたというのだから、まあそれはほんとうだろう。

それにしても、ペリクレスが死んで、これでもう三十年になる。そのあいだに、人々はペリクレスやアスパシアの名のみを覚えていて、その余は忘却の女神にあたえてしまったのであろう。試みに、たとえばこのペリクレス第二世に、偉大なるペリクレス第一世は何をした人であるか訊ねてみるといい、彼は自信なげにぼんやりと答えてくれるだろう。「そうやな、なんやえらい人らしかったけど……」

「アスパシアじゃない、バッキュスというんだ。おまえさんがたは知らんだろうが、あれは第一流中の一流で、一晚遊ぶので、おまえさんがたのまるひと月分のお給金かとぶね。おまえさんがたは、やっぱりあのアクロポリスの裏手の一晚三オボロスといった女が似合いだよ」

「それくらいなら、裁判所のお手当をつぎ込めば行けるでしょうからな」

とつさんがふいに口を出した。テウクロスはにらんだ。とつさんは平気だった。

「それに、ちよいとおうかがいしますが、さつきから、『おまえさんがた、おまえさんがた』ときかんにおっしゃっています、その『おまえさんがた』には、あなた様ご自身はお入りになりませんかね」
アンドキデスがゆつくり口を出した。テウクロスを除いて、みんなが笑った。

「それとも、あなたさまは、あのスケにつき込んだおかげで、アゴラで石をかつがなければならぬとおっしゃるのですかね。もとは大金持の貴族だったというのにね」

「ほんとかい」

ペリクレスがすつとん狂な声を出した。

「テウクロスは貴族の出かい」

アンドキデスは苦笑し、出まかせを言いつづけた。

「そうだよ。だから、彼は民主政治の敵だ」

彼らは退屈していた。で、賭をしていた。つまりぬ賭だった。柱廊の大理石の柱の横手に長く列をつくって腰を下ろし、あわれな犠牲者を待ち受ける。

「クリティアス」

彼らは叫んだ。

「財布が落ちたぞ」

「クリティアス」と呼んだだけでは、人はふり返らないだろう。「財布が落ちたぞ」がくつつけば、欲ばりのアテナイ人士のことだ、自分の名前でもたいていのやつが立ち止まるのにちがいない。立ち止まるか、立ち止まらないか。それだけで賭になった。賭金はどこから手に入れるのか。心配はいらない。彼らの大将アガタルコスの才覚を信頼しよう。

あらかじめ、賭けの対象に目をつけておく。高慢ちきな中年男。眼玉をギョロつかせている青年。老人のくせに赤靴をはいている男。ミレトス産の外套を軽く着こなした貴族。大きな指環を指という指にはめこんだ成金。逆にハダシ、上衣なしでスパルタ風の質実剛健を気どる哲学者。もはやものを教える以外に能がなくなった学校の先生(あいつは若いくせに、もうチンポコが言うことをきかないって顔をしているぜ)。ひと目で「お釜掘り」の好対象だと判る美少年。(「ああ、あいつの尻にくらいついてやりたいな」「止めておけ、すぐおならをしそうなお尻だ」——「クリティアス!」彼らは叫ぶ。「財布が落ちたぞ」)

何人かが立ち止まり、反射的に下を見る。とたんに、笑声が起こるのだ。意識的なゲラゲラ笑い。そのときには、すでに、アガタルコスの第一部下のミンダロスが男の行く手に立ちはだかつている。

「あんたはクリティアスかね。クリティアスというと、スパルタ占領軍の御威光をかさにきて、しい放題のことをやりやがった男だな。え、なんだって、クリティアスはもう死んだって。革命軍の矢にあたって死んだ……うん、そうだったな。そうすると、ここにいる男はこれは何だ。何? つまり、こいつは、クリティアス第二世だって。もう一度、民主政治をぶっこわして、あの三十人政権の恐怖政治を復活させようともくろんでいる。おい、みんな、きいてくれ。こいつは民主政治の敵、わしら

の敵なんだ。裁判にかけなくちゃならん。こいつにふさわしい刑は……」

「死刑だ」

アガタルコスがゆつくり言った。男のまわりにはすでに彼らの円陣がつくられている。

「わしはクリティェアスとちがうよ。アロペカイ区に住むアナクシラオスの子ラケスだ」

声がかすかにふるえている。「おい！」アガタルコスが大声を出した。

「ぎいてやってくれ、みんな……いいかね、この男はラケスだという。とすると、どうなるかね、ラケス氏はクリティェアス氏の財布を拾おうとした。つまり、自己の所有にあらざる物品を取得しようとした、現物はそこに存在しなくても、すくなくともその行為への意志を示した。つまりだな、このおっさん、泥棒だということじゃないか」

円陣は馬鹿笑いした。誰かがわざとらしくおならをした。

「実弾は出すなよ。おまえの underwear にウンコがつくぞ」

「わしは泥棒じゃない」

男は憤然として叫んだ。アガタルコスの相手をばかにしきつた声がそれにつづいた。

「泥棒でないとする、あんたはやっぱりクリティェアス第二世かね。民会へ突き出してやる必要があるな。あんたがよしんばラケスであつても、クリティェアス第二世をひそかに名のり、反民主的陰謀を企んでいると……」

「警官を呼ぶぞ」

男は叫んだ。いや、そのまえに、彼らが叫んだ。「警官を呼ぶぞ、このトンチキめ」 通行人は彼ら

が冗談を言い合っているのだと思うだろう。実際、つい五米先の広場のなかを警官が横切つて行つた。手つとり早く、男は小銭を出した。ミンダロスがひつたくるようにしてそれを取り、つづけて、舌足らずの甘えた声を出した。

「ねえ、おじさん、ぼくらはお金など欲しくない」

「何が欲しいんだ？」

アガタルコスが重々しくつくつた声で訊ねた。

「おじさんとこの娘さんが欲しいんです。嫁さんにね」

「わしには娘などいやせんよ」

男は憤然と言つた。

「何言っているのよ、この嘘つき、いやよ、嘘をついちゃあ、ねえ、クリティアスさん、ハゲ頭のクリちゃん」

やつと十六歳になつたばかりのメノンが女のような身ぶりをした。それは堂に入つていた。ときどき、彼はほんとうに女の着物を着た。アガタルコスはそれを好んだ。

「あんたが妾をこしらえてるつてことを、ぼくらはちゃんと知つていんだ。ほら、アルキビアデスの娘を、あんたはちゃんと妾にしてけつかる」

ミンダロスはまくしたて、みんなは笑いつづける。裏切り大将アルキビアデスも、アテナイでは悪名高い名前だ。

「なんという娘かね」

「ヘレネというんです」

「あの白き腕のヘレネか」

「ええ、ただ、臭いんです」

「臭いつて……」

アガタルコスがまたまじめくさった表情で訊ねる。

「どこがかね」

「なに、噴火口がですよ。臭いつたら、ありやしない。アゴラの魚市場で十日も魚づけにあつてりや、あんな匂いがあるんかな。あそこいろんなものがたまるせいかな。万物は流れるのだから、女のあそこだって、いつも流れているはずだが……ふしぎだな。つまり、ゼノンの言うように運動というもの、のほそも存在しないんだな」

「それより、おれはヘレネの手足を動かしたいよ」

大男のマルプシアスが感にたえたような声を出した。マルプシアスだけが、このグループのなかで三十歳をこえていた。年下のアガタルコスの言いなりになっている。大男総身に智慧がまわりかねの典型みたいな男だ。みんなはまた馬鹿笑いした。

男は泣きそうになった。

「行かせてくれよ」

「しかし、そのまえに、ぼくの欲しいものをおいて行って欲しいものだ」

「ゼウスにかけて、それは何だね」

アガタルコスミンダロスに裁判のときの原告の口調で訊いた。

「ぼくの欲しいものは、諸君、過去のアテナイ大帝国の栄光である。あの大帝国の理念と精神は、今、どこへ去ったか。いたずらにわれわれの手中に残されたるは、過去の栄光の抜け殻のみではないのか。たとえば、アクロポリス、諸君、あそこに何を認めるか」

「何も見えないよ、おじさん」

ミンダロスは、アゴラを威圧するようにそびえるアクロポリスの丘にむかつて大きく手をふりまわし、メノンが金切声を出した。まったくこいつの声は女の声だ。アガタルコスは彼をその骨つぽい両手で抱きしめたいと思った。そして、接吻だ。彼の唇は朝の露にぬれた苺の味がする。

「バルテノン神殿、アテナ神殿、アテナ・プロマコスの像……それらは昔のままだ。しかし、想起しよう、スパルタ軍がこのアテナイの地に来たとき、どこへ彼らの兵營を選んだのか。アクロポリスだ。あの聖なる丘の上に、司令官リュサンドロス以下がたむろした。諸君、ぼくはその日の屈辱的な光景を忘れ去ることはできない。アテナイ市民が無言に見守るなかを、彼らは悠然とまた傲然と、アクロポリスめがけて登って行く。あれ以来、諸君、われらは精神を失ったのである。われらのここにあるのは、抜け殻である。形骸である。箸にも棒にもかからぬガラクタである。おならである。ウンコである。自瀆のときに噴出する精液である。われらは今一人のペリクレスを求めている。ああ、あの偉大なペリクレスの時代。一人の決断力ある偉大なる政治家。その二つが今日ほど求められているときはない……」

ミンダロスはいい気になって、民会の演説者の真似をしていた。もうけつこうだ——アガタルコス

はふと思つた。アガタルコスが真面目にそう考え出したとき、真面目にうんざりし出したとき、ミンダロスの演説がまつすぐにアガタルコスの胸に突き刺さつて来始めるとき、遊びはおしまになる。「もういい」

彼は不機嫌に言つた。

彼らは突然に円陣をといた。呆氣にとられた男を残して、ふたたび、大理石の柱のかげに仲よく並んで腰を下す。オボロス貨が彼らのあいだで、あるいは大男マルプシアスの大きな節くれだつた掌からメノンの小さな白い掌へ、生命線のやけに長いミンダロスの掌から、生命線の代りに恋愛線をいつも見せびらかすアガタルコスの掌へ動いた。多くの場合、元手は、さっきの男のような哀れな犠牲者からとりあげたお金だつた。それを、アガタルコスは、ゆつたりした動作で人数に分ける。もちろん、彼のとり分として大きくピンはねしたあとでだつた。

「何か起こらんかいな。パツパツと何かおもしろいことが起こりよらんかいな」

メノンが、賭けに飽きたあと、両手をあげて背筋を伸ばしながら叫んだ。

「アクロポリスに火でもつけるんだな」

アガタルコスは何気なく答えた。みんなは笑つた。その笑声のなかで、彼はまたふいに不機嫌になつた。自分のそのことばが重苦しく胸にたれ下る。焔のなかに崩れ落ちるパルテノン神殿。いちめんの火の海のなかのアテナ・プロマコスの像。しかし、そのとき、彼はどこににいるのだらう。彼もまた、焔のなか、火の海のなかにいるのではないか。二十六歳の、彼ら「黒い翼」団の団長、街の小悪党の主、メロスからの引き揚げ者ダモクセノスの長男。彼はどのような顔で、どのような表情で、火

の熱さをこらえるのか。いや、そのとき、火はほんとうに熱いのだろうか。火は、彼の心のように冷えきっているのではないか。

「アクロポリスに火でもつけるんだな」

彼はくり返して言った。

「いいか、おれは本気なんだぞ」

今度は誰も笑わなかった。アガタルコスは黙り込んでしまった彼の部下を一わたり見まわしたあとで、メノンをあらあらしく引き寄せると、大仰に接吻した。

メノンの唇は朝の露にぬれた苺の匂い——いや、もうそれはしなかった。妙にいがらつぽかった。

「おまえは胃病だな。口が臭いぞ」

みんなは笑った。すかさずミンダロスが口をはさんだ。

「女のどこかみたいにね」

アガタルコスは大声で笑い、それから唐突に笑いを止めた。

パウサニ阿斯は友人のヒッピ阿斯と立話していた。話は先ず息子カリクレスの縁談についてだった。相手はバッタロスの三番娘キュノのだが、いったい、バッタロスの財産はどの程度なのか。『結婚には勘定を忘れるな』というからな」パウサニ阿斯はヒッピ阿斯にそう訊ねてから、照れかくしのように言った。しかし——ヒッピ阿斯は、彼の昔の戦友パウサニ阿斯をつくづくと見た。パウサニ阿斯は

自分のことをどう考えているのだろう。「勘定を忘れるな」ということわざは、花婿花嫁の実家が同じ程度の財産を持つていることを前提としているのだ。あちらのほうも同じことを言っているだろう。自分のことから考えてみるといい、まして、あいだにたっているのはグリユケラではないか。老練にして老獪、俊敏にして狡猾な結婚周旋屋の彼女のことだ、どちらの調べも十分に行きとどいていることだろう。ということは、バッタロスの金持の程度は、パウサニアスのそれと同じく、まったくたいしたことがない、いや、憐れみをかけてもらってもいいくらいのものだということであるにちがいない。バッタロスも、パウサニアスと同じように早起きして小遣いかせぎに民会へ行くのだろう。

「今日もプニユクスの丘へ駆け登ったのかね」

ヒッピアスは皮肉に訊ねた。民会はプニユクスの丘で行なわれた。

「いや、今日は裁判所だ」

アテナイの直接民主制は裁判所にまで及んでいて、毎年、六千人が無作為に選ばれて、陪審員になる。ヒッピアスもパウサニアスと同じくその一人だったが、彼はほとんど出かけたことがなかった。「きみは何故裁判所へ出ないのだ」パウサニアスがいつかそう訊ねたとき、ヒッピアスは「めんどくさいからね」と答えてから、「じゃあ、何故、きみは出るのだね」と反問した。

「これは市民の義務だ」パウサニアスは大きく言った。なるほど、ただ、その義務には、お返しがある。わずか三オボロスの金額にしても、日当というお返し——ヒッピアスはその皮肉を噛み殺した。パウサニアスの上衣の裾がすり切れて、そこが彼のモジャモジャの髪の毛のようになっていた。

「今日は何の裁判があったんかね」

「何だったな、公金横領だったと思うな。大男でな。子供を五人も連れて来よつた。餓鬼どものひもじさに目がくらんで、と言いいい、子供を泣かせようとするんだが、うまく行かぬ。そのうち、なんちゆうことかね、いちばん小さいのが笑い出してしまひよつた。そいつがまた榮養がよくてまるまる肥えていた。陪審員全部が笑い出してしまひよつた。そうすると、何が起こつたと思うかね、ヒツピアス」

「判らんね」

「大男が泣き出しよつたんじゃ。それもな、オロオロ泣くというような生ままやさしいもんじやない。大声をあげて泣きわめきよつた。まるで子供のようちにね。おおかた、泣かない子供五人分の涙を一人で引き受けよつたんじゃろ」

「それで、どつちに決まつた」

「もちろん有罪じゃよ」

パウサニアスは齒をむき出して笑いながら言った。

「わしも有罪に投票したよ。はじめ、無罪に入れてやるつもりじゃつたんだ。泣き方が真に迫つていだからな。そいつが、投票直前になつて、コロリと氣持が變つた」

「どうして變つたのかね」

「判らんね」

パウサニアスはあつさり言った。

「ふいとそんな氣になつたんじゃね」

「それだけかね」

「それだけじゃよ」

ヒツピアスは大声をたてて笑った。そのパウサニアスの受け答えがとてつもなく愉快なことに耳にひびいたのである。パウサニアスはふしぎそうに彼を見た。彼は照れかくしのように言った。

「日当はもらったのかね」

パウサニアスは素直にうなずいた。ヒツピアスは彼のその素直さを好んだ。

「また酒手にするのだろう」

彼はまた素直にうなずいた。

ヒツピアスは彼と別れて、アゴラのなかをさまよいながら、パウサニアスがどのような刑の判決をその男に下したか訊ねるのをすっかり忘れてしまつていたことに気がついた。訊ねたなら、あの無邪気な老人は素直に、わるびれずに答えてくれたことだろう。

「何だったかな、ええと、死刑だった。わしはあいつを死刑にしたんだな、そうだったな」

人々が大声をたてて走り出していた。メレトスも走った。

「掏摸だ」一つの叫びは言った。「かつばらいだ」他の叫びが叫んだ。

掏摸でもかつばらいでもなかった。ただの病人だった。いつのまにか円陣ができ上つていて、その中心では、四十すぎの女が地面に倒れてのたうちまわっていた。口からアワを吹き、体はときどき弓

状に硬直し、そのたびにこの世ならぬ叫びをあげた。

「どうしたのですかね」

円陣の背後からのび上つてのぞき込みながら、メレトスは横の男に訊ねるともなく訊ねた。

「エントウワーシアスモス神がかり」だね。あいつは信心が足らんのだな。それと、もう一つは、嘘のつきすぎで、人

のうらみがあいつの上にいま落ちかかって来ているのだろう」

男はふり向きもしないで答えた。

「いったい、あの女は何者ですかね」

「きみは知らないのかね、あいつを……知らないとすれば、きみは純真な若者だよ。テアノを知らない男に幸いあれ。彼女は取持屋だよ。ほら、情事、姦通の仲介屋だ。きみがもし人間なら、人間として人間に忠実であるなら、きみにとって必須不可欠の存在だと、おれは思うがね。まあ、それには異論があるだろう」

男はのたうちまわるテアノを見ていた。それは、さかりのついた動物の動きを見るような、投げやりで冷淡な見方だった。

「放つておいて大丈夫なんですか」

「きみは心配性だね。心配性の男は出世できない」

彼はあいかわらずそっぽを向いたままで断言するように言い、それから、また投げやりにつけ加えた。

「しかし、考えてみると、出世したって仕方がない……」

「どんなふうにして、治療するんですかね」

『カタルシス療法』だよ。あれでやるんだ。きみはそれを知っているかね」

メレトスは黙っていた。男はそれを彼の無知と正當に解釈した。

「ヒポクラテスという男がいた。医学の父だ。彼のことは知っているだろうな」

メレトスはまだ黙っていた。彼は軽い腹立ちを覚えていた。なんの権利があつて、この男は自分にお説教を試みるのだろうか。

「よろしい、彼が、ある日、一つの治療法を考えだしたとしよう。それは『類似療法』と言つてもいいものだが……つまりだな、性質の等しきものにおいては、より大きなものはより小さなものを吸収するといふのだ。きみに熱が出る。すると、きみは体をあたたくする。ということは、体の外により大なる熱を加えるといふことじゃないか。それによつて、体内の熱は吸収され、熱は下る。同じことだよ。『神がかり』には、気狂いみたいな音楽をきかせてやるといい。そうすると、より大なる狂気に小なる狂気は吸収されて、体の方から言へば、カタルシス排泄されて体外に出て行つて鎮まるという寸法だ。きいているかね、きみ」

男はふいにふり返つて、メレトスを見た。メレトスはあわててうなずいた。まるで強制されたやうなうなずき方だ。彼はそのことに気づき、自分に腹を立てた。うなずく必要はべつになかつたのだ。男は彼の全身をなめまわすように子細に見た。小さな眼だつた。深く落ちこんでいて、少しも柔和でなかつた。メレトスは自分がその眼のなかにとらえられてしまったように感じた。たしかに、男の眼のなかでメレトスが泳いでいた。三十四歳の青年悲劇詩人。ただしほとんど無名。やわらかい長い髪（彼はその頭髮が自慢だつた）。ヒゲ少々。そこまではよかつたが、ぐあいのわるいのは、彼の体だつ

た。最近やけに肥って来たのだ。彼は人生に絶望していたが、すくなくともそんなふうには自分では考えていたが、絶望すればするほど、彼のおなかは突出して来るのにちがいがなかった。「絶望を食って肥る男」——そう言ったのはケルドンだった。あのわけの判らない奇妙な少年。少年はひとしきり自分自身のことばにひとりでも愉快げに笑いこけてから、つけ加えた。「しかし、ぼくだつてもうじき肥るのだろうな。絶望しているのだからな」

「絶望を食って肥る男」は、いま、その見知らぬ男の眼のなかで泳いでいた。男の眼は小さいのだが、それでいて、蒼いひとみの海はかぎりなく広く、またふかいのだ。その海の底へ、メレトスが、メレトスの全存在がのめり込んで行く。彼はそこで溺死させられるのではないか。

男は、まだしぬけに、彼に背中を向けた。円陣のなかでは、あいかわらず、テアノがもがいている。いつのまにか、二人の男と女がそばへ来て彼女の背中をなでたりさすったりしているのだが、それがどのような効果をもたらすというのか。テアノの手が虚空をつかむ。突風が吹く。砂が舞い上る。テアノの体に降りかかる。

「ああ！」

だしぬけにテアノが叫んだ。砂まみれになった上体を起こして、彼女は宙空の一点をゆびさして硬直したように動かない。みんなはいっせいに空を見上げた。

何ごともなかった。何ごとも奇跡は起こつてはいなかった。一羽のトンビがゆっくり旋回している。ただそれだけであった。その飛行は凜としためぐり方ではなかった。翼に穴が開いているのではないか。どこか不安定で、円というよりは不均衡な楕円を描く。ときどき、あれはいつたい何を地上に認

めたのだろうか、思い出したように高度を低める。テアノのうつろになった魂が呼ぶのだろうか。それとも、彼女自身が獲物なのか。円陣の人垣がもしなかったとすれば、彼女はそのトンビによってあつげなくどこかへ、そう、たとえば世界の涯、タウリス人の住むあたりにまで連れ去られて行ったのかも知れない。メレトスは不安げにトンビの姿を追った。そのトンビは彼の心のなかにまで容赦なく侵入して来るように見える。

ふたたび、人垣が騒然とした。メレトスはいわてて視線を下した。テアノがあっけらかんとした表情で円陣の中心に立っていたのだ。

「あんたがたは何をしているんかね」

みんなは笑った。

「何を笑うんかね」

「あんたは天国へ行っていったんだよ」

円陣のなかの一人が言った。

「どんな天国かね」

「あんたがあれを一発やらかしたとき、うめくだろう。死んだような気になるだろう。あのときの天国と同じだ」

みんなはまた笑った。

「だけど、私は苦しかったんだよ」

テアノはまぬけな口をきいた。

つづきは製品版でお読みください。